

那智の火祭

那智の火祭は、毎年 7 月 14 日に開催されるの例大祭です。熊野那智大社の創建（317 年）に起源を持つこの祭りは、日本の「三大火祭り」のひとつとされています。

那智の火祭の正式名称は扇祭です。祭りの中心となるのは、熊野那智大社から那智大滝へと 12 基の扇神輿と呼ばれる神輿を運ぶ神輿行列です。道中、これらの神輿は巨大な松明の炎で清められます。

扇神輿：滝と日の丸

扇神輿は、ほとんどの日本の祭りで担がれる神輿とは異なっています。駕籠に担ぎ棒がついた一般的な神輿に対し、扇神輿は幅 1 メートル、高さ 6 メートルと那智大滝をかたどった細長い形状をしています。それぞれの扇神輿は 32 枚の日の丸が描かれた扇で飾られています。これらの扇は、太陽の全てのものを照らす光を象徴する 8 枚の丸い鏡とともに神輿に取り付けられます。各神輿の先端には細長い木の板が日輪を模した形に配されています。熊野那智大社の宝物殿には、過去にこの祭りで使われていた鏡や扇神輿のミニチュア模型が展示されています。扇祭で使われる全部で 12 基の扇神輿は、それぞれが一年の各月を表しており、どれもぴったり 365 本の竹の釘を使って作られています。

神々の再生

火祭の日には、熊野那智大社の祭神 13 柱のうち 12 柱が扇神輿に移され、那智大滝に向かいます。（例外は那智大滝に祀られている飛瀧権現です。）それぞれが 50kg もある大松明をいくつも従えた行列は、これらの扇神輿を那智大滝のふもとの飛瀧神社まで運びます。大勢の観衆に見守られながら、松明と神輿の担ぎ手は、特徴的な「ハリヤ！ハリヤ！」という掛け声を発し、歩調を合わせます。飛瀧神社に着くと、扇神輿は炎で清められ、滝に向かって一列に並んで立てられます。そして、一年の息災と五穀豊穡を願う祈祷が行われます。

那智大滝は、熊野那智大社の祭神のふるさととされているため、扇神輿の行列は神様の里帰りのようなものです。この火と水の神事では、那智の信仰の中核をなす神聖な滝の力によって、神々は再生し、神威を新たにします。